

JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷 2-35-10

本郷瀬川ビルテ113

TELEPHONE 03-3812-6664

FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI NEWS

054 MAY 20.
2000

発行者

都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集テーマ：「焼物の里づくり」

- | | |
|--------------------------------|---|
| 1. 産地再生への挑戦
—やきもののまち瀬戸— | 1 |
| 2. 岐路に立つ陶都・瀬戸 | 3 |
| 3. 常滑のまちづくり—愛知県常滑市— | 5 |
| 4. 産地機能の再編を目指す常滑「やきもの
の里」計画 | 7 |

5. 陶芸のまちの都市環境デザイン

—多治見市におけるまちづくり—

8

●委員会活動報告

10

●10周年記念事業

11

●事務局より

12

特集：焼物の里づくり

今回は、日本の伝統産業の中でも重要な分野の1つである焼物（陶磁器）をとりあげ、現代まで連綿と続く歴史の中で、焼物と共に歩み続けてきた地場産業都市としてのまちづくりと環境デザインをテーマにした。とりあげた都市は、愛知県瀬戸市、常滑市、岐阜県多治見市である。いざれも名古屋市中心部から時間距離で1時間以内にあり、焼物の里として古い歴史を有しつつ、現在もなお陶磁器の産地として全国的に大きなシェアを持っている都市である。従って「まちづくり」も、産地としての体力強化などを含んだ将来展望の中で、多様な施策と共に環境デザインが位置付

けられ、具体化されてきている点が興味深い。

また、瀬戸市、常滑市については、それぞれ行政と専門家の異なる立場の執筆者に原稿を依頼した。同じ町のことではあるが、違う側面から光をあてて頂いており、パースペクティブな状況把握が可能である。

また、全国スケールでみればかなり近接した立地条件にある3市が、互いの存在を意識しつつ、それぞれの道を歩みつつあるといった状況も伺える。焼物3都市物語として見ることも可能である。(編集企画：石崎均、伊藤光造)

特集

1

産地再生への挑戦

—やきもののまち瀬戸—

古池 嘉和

KOIKE YOSHIKAZU

株都市研究所スペーシア

1. やきもののまち瀬戸

瀬戸市は、名古屋市の北東約20kmに位置するまちである。市の中央部を占める丘陵地の地質は、瀬戸群層と呼ばれる地層で、やきものの原料である良質の陶土を含んでいる。また、市北部・東部の山地には、かつて、やきものづくりの燃料であった樹木が広がっている。こうした自然資源と環境に恵まれ、約1300年という陶磁器生産の長い年月を刻む産地として栄えてきた。瀬戸市に行くには、名古屋の中心栄町から名鉄瀬戸線である。約30分で終点の尾張瀬戸駅に着く。まず出迎えてくれるのは、懐かしい駅舎である。かつては2階がパーラーとして利用され、賑わっていたという。多くの町が近代化を求めて歴史の文脈を自ら

放棄する中で、尾張瀬戸駅は、今なお瀬戸市の顔となっている。



高台からみた瀬戸の風景

駅を降りると目の前には瀬戸川が流れている。瀬戸市のシンボル的な川であり、陶磁器工場の集積はこの川の南北に広がっている。このあたりは、坂道や細街路が多く、入り組んだ場所に多くの陶磁器工場が見受けられる。天日で乾燥させる風景なども窯業の町ならではの風景である。こうした光景を眺めながら駅から東に歩いていくと、もっとも瀬戸らしい風情を醸し出している「洞まち」へ至る。

2. 洞まちでの取り組み

洞まちはやきものの町である瀬戸市の特徴が色濃く残る地区であり、歴史的・文化的な資源が多く残されている地区である。今日でも、瀬戸の陶磁器産業の主要な産地として多くの陶磁器工場が操業し、陶芸作家が創作活動を行っている。建物や街路には、往時を偲ばせるものが数多く残されている。それらの資源を積極的に保存・活用し、自然と調和したまちなみや散策路の整備などを推進するため、地元有志の集まりである「洞町文化会」を中心とする地元住民と行政が一体となって事業に取り組んでいる。「窯垣の小径」と呼ばれるこの散歩道は、こうした暮らしの佇まいをそのままに、ひっそりとしたもてなしを基調とするものである。散策路は、通路に敷かれた「タナイタ」や、敷地の法面に積み上げられた「エンゴロ」など、陶磁器の焼成の際に使用する窯材を使った空間となっている（写真）。永い年月を経て、自然の草木と融合した風景を通じて、窯業を生業としてきた地域の文化を偲ぶことができる。散策路の一端には、「窯垣の小径資料館」がある。日本の量産タイルの始まりである「本業タイル」が張り詰められている浴槽を持つ明治時代の窯元の民家を再生したものである。ここでは、地元の人々がボランティアで案内してくれる。窯垣の小径は、人と人の出会いを基調とした散策路として、視覚的な風景と心象風景が融合した交流の場でもある。その窯垣の小径から山一つ越えたところにあるのが赤津地区。言わずと知れた「赤津焼」の産地である。そこでも新たに産業観光としての取組が始まっている。その背景には、陶磁器業界の置かれている今日的な状況とも深い関係がある。

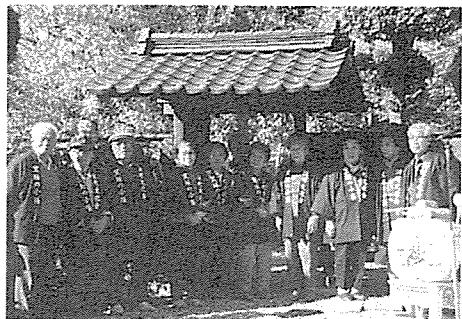
3. 消費者との交流による陶磁器産業の新たな展開に向けて

かつて高度成長期には、作れば売れた時代が続いた。ひたすら生産する、まさに“工場”としての都市であった時代である。しかし、今日、状況は一変した。海外の安価な製品に押され、国内市場もギフト需要の低迷等で伸び悩む中で、新たに

需要を創造しなければ産地として生き残れない時代になった。デザイン力、提案力など付加価値が問われるようになってきたのである。そのためには、消費者とのコミュニケーションを図ることが求められる。つまり、消費者のニーズを掴み、生活を彩る暮らしの提案を行うことが必要となってきたのである。こうした中で、赤津地区では今年の5月に「第一回赤津窯の里めぐり」が行われた。スタンプラリー等ユニークな企画と合わせて窯元を訪ねて歩くものであり、生産者と消費者との交流の場となった。こうした動きは、赤津地区以外でも生まれており、市の北部に位置する水野地区でも同様に「水野窯めぐり」が5月に開催された。生産の場としての色合いの強かった瀬戸は、消費者との交流の場となってきたのである。こうした流れは既存の資源をネットワークし、市全体を交流の場としていく動きへと繋がっていく。

4. フィールドミュージアムの理念の元に

中心市街地において新たに魅力ある施設が二つ加わった。一つは「瀬戸市新世紀工芸館」である。若手のアーティストの陶芸やガラスの作品を無料で鑑賞できるギャラリーや、瀬戸の土でやきもののづくりに挑戦できる体験工房などがある。企画展では主に地元作家の作品が紹介され、瀬戸市の作家を訪ねる拠点としても機能する交流の拠点的施設である。もう一つが今年の4月にオープンした染付の展示等を行う「瀬戸市マルチメディア伝承工芸館—瀬戸染付研修所—」である。そして、こうした施設を結ぶ散策路も整備された。古いものを大切に守りながら、新たな要素を加え、フィールドそのものを楽しむまちにしようとする理念であるフィールドミュージアム。それは、瀬戸のまちづくりのコンセプトでもある。瀬戸が、生産者のデザインマインドを刺激するような感性豊かなフィールドとして熟成することを期待したい。そうなれば、5年後に開催される国際博覧会における動態的なパビリオンとして、必ずや訪れる人が感動を呼ぶステージになるに違いない。



窯垣の小径観光ボランティア



窯垣の小径（タナイタとエンゴロのある風景）

岐路に立つ陶都・瀬戸

中桐 章裕

NAKAGIRI AKIHIRO

瀬戸市市長公室企画課

1. 陶都・瀬戸

名古屋の都心から電車で30分、距離でいうと約20kmのところに「せともの」のまちはある。人口は約131,000人、中規模なまちである。せとものの歴史は今から約1300年前にさかのぼると言われており、現在もこのまちはせとものと深い関わりを持ち続けている。しかし、ここに来てやきもののまちは大きな岐路に立っている。

第2次大戦後、瀬戸の陶磁器産業は輸出を主体として、いち早く復興し、急速に発展を遂げた。良質な原料を地元で確保できたことと戦災をほとんど受けなかったことが主な理由である。その後円高や海外生産の影響を受け、昭和55年頃を頂点として生産額は年々減少傾向になり、廃業する工場が出始めた。せとものまちとしての顔が見えなくなってきたのである。

このまちは、これまで「ものづくり」のまちとして成長してきた。しかし、そこに限界が見え始めた今、住む人や来る人にとって魅力あるまちとなるために、新たなせとものまちとしてのコンセプトが必要となってきた。そこで瀬戸市では、市全体を美術館・博物館とする「瀬戸市フィールドミュージアム構想」を策定した。

2. 瀬戸市フィールドミュージアム構想

この構想の目的は「人の暮らしが見えてくるまち」としての瀬戸の再生、人との交わりの中で生きたコミュニケーションが創造される「癒しのまち」の創造、誇りに満ちた魂の通った「ものづくり文化の里」の継承、この3点である。長きにわたって培われた地域資源である、技・人・自然を演出空間として展開していくものである。

まず、拠点地区として空洞化が進む中心市街地地区を設定、その中に東西軸と南北軸を作ることにとした。

東西軸については、現在進められている尾張瀬戸駅地区市街地再開発事業と記念橋周辺地区市街地再開発事業、2つの事業を初めとした拠点開発事業及び散策路「陶の路」整備事業を基盤として、地域内に点在する施設の回遊を実現するものである。

図1中の各施設についてであるが、尾張瀬戸駅地区再開発事業は「交流拠点」として、ホテルとNPO支援センター等のコミュニティ施設を有する駅ビルを整備する事業である。

一方、記念橋周辺地区再開発事業は「産業・商業拠点」として、商業施設と市民会館等の公共施設を整備する事業である。

新世紀工芸館は、陶芸・ガラス工芸に関する若手の育成を行う施設として昨年5月に、またマルチメディア伝承工芸館は伝統工芸である瀬戸染付焼の人材育成・情報発信の場として今年4月にそれぞれオープンした。

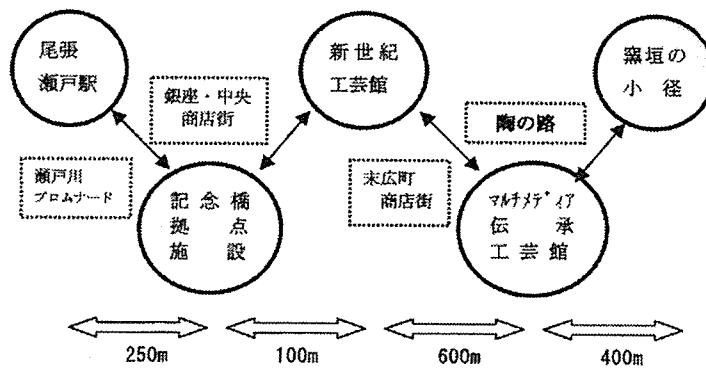
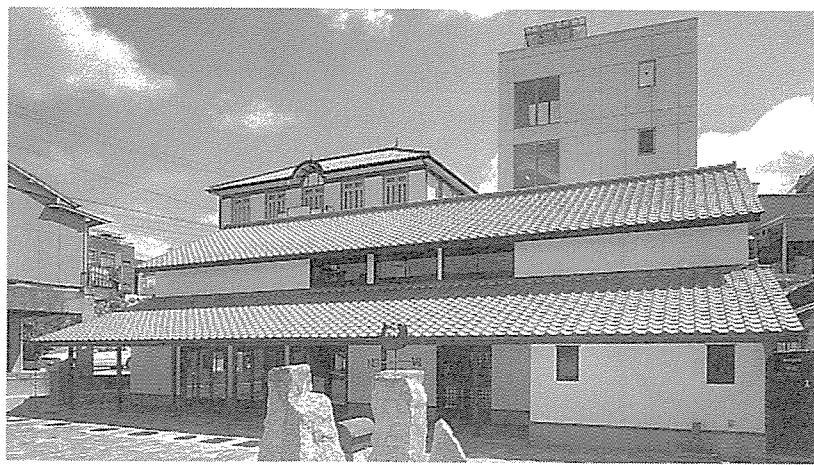
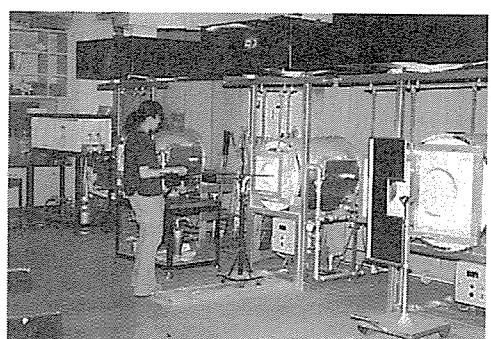


図1



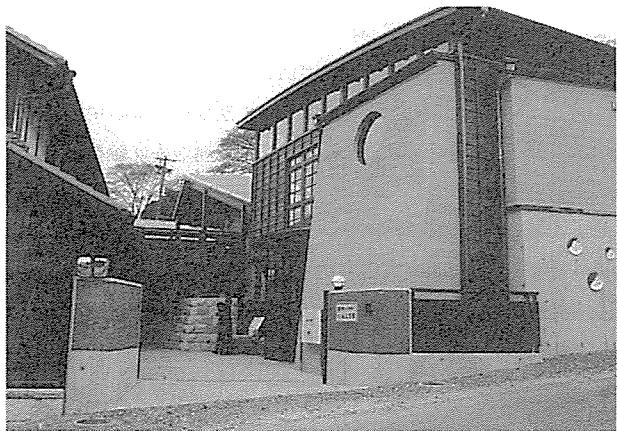
新世紀工芸館は交流棟、展示棟、工房棟の3棟で構成



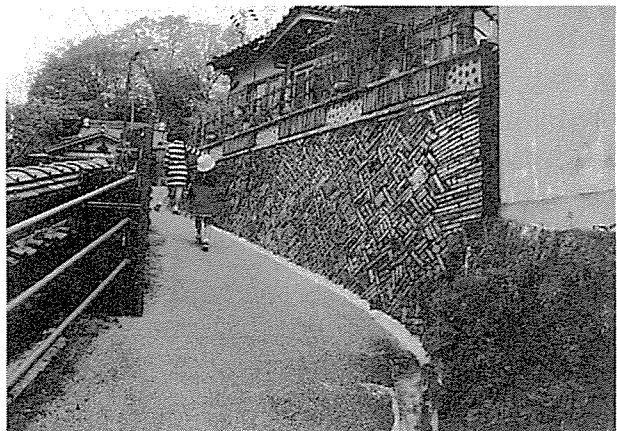
ガラス工芸工房の様子。ガラス工芸コースは10人、陶芸コースは12人が定員

こうした施設が約1.3kmという適度な距離にあり、その施設が陶の路で結ばれるとともに、CATV回線を使って各施設間情報提供も行われ、ビジターズインダストリー確立の条件が整いつつある。

東西軸の東端にある窯垣の小径は、不用になつた窯道具で作った塀や壁が多く残っている場所をつないだ約400mの細い路地のこと、その中間地点に地元ボランティアで運営する窯垣の小径資料館がある。

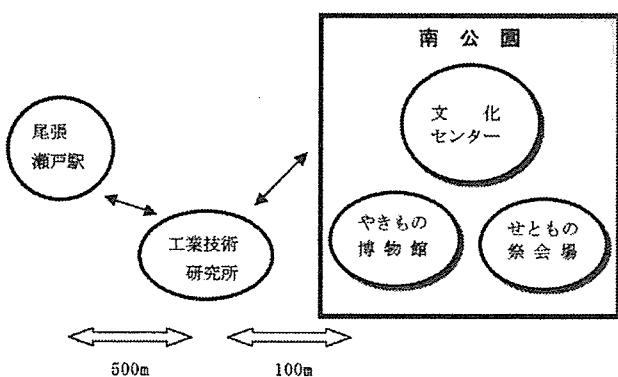


マルチメディア伝承工芸館は、本館、交流館、古窯館の3館で構成



窯垣の小径。幾何学模様や色合いが歩く人の目を楽しませる

次に南北軸であるが、前述の尾張瀬戸駅を起点として、都市公園である南公園までの約600mを設定した。途中には、陶磁器に色を付ける釉薬のテストピースを初めとして多くの産業的価値を持つ資産を有する名古屋工業技術研究所瀬戸分室があり、これらの資産公開も含め、連携のあり方を検討していく。



そして南公園内には、既存施設として市文化センターがあるが、それに加え博覧会開催年2005年までに「やきもの博物館」の建設を予定しており、教育・文化ゾーンとして整備を続けていく。

このように現段階では、中心市街地に限って整備展開を考えているが、周辺地区へも順次取りかかることにしていく。

3. 産業観光都市への挑戦

甚だ簡単ではあったが、せともののまちが取り組んでいるまちづくりについて紹介した。

瀬戸に生きる人々の歴史と営みが見えてくるまちを創造するため、様々な人々が連携しながら互いの役割を持ち、まちづくりの知恵や工夫をプログラム化していく。それはまちづくりの過程そのものであり、住む人は勿論のこと、来る人も共に蓄え、育て、共有化していくことが大切である。

2005年には、国際博覧会がこの地で開催される。博覧会は一過性のものであるが、世界規模のイベントであるため、開催インパクトは大きい。このインパクトを活用し、一人でも多くの方にせとものまちに来ていただきたい。

1300年の歴史が作り出してきた独自の文化を観て、体験してもらう。それが瀬戸市の考える産業観光都市としてのあり方であり、それを支える力はこのまちには十分あると確信している。



陶の路。せとものまちを探訪する散歩道

常滑のまちづくり

—愛知県常滑市—

青木 孝義

AOKI TAKAYOSHI

名古屋市立大学芸術工学部助教授

杉江 理代

SUGIE RIYOKO

常滑市商工会議所

杉江 恵子

SUGIE KEIKO

常滑郷土文化会「つちのこ」会長

柿田 富造

KAKITA TOMIZOU

元・窯のある広場資料館館長

1. はじめに

名古屋の南約 40 キロの地点に位置する常滑市は人口約 5 万人のまちで、伊勢湾に面した海岸線が南北に 16 キロ伸びています。常滑地区は、日本六古窯のひとつとして約 900 年の間、焼物を焼き続けてきた歴史があり、工業出荷額の過半数が窯業関係といった焼物のまちです（写真 1）。市内の小高い丘からは、まちのシンボルともいえる窯場に付属する赤いレンガ煙突や黒い板塀の工場が見え、その向こうには伊勢湾が遠望できます。このように、常滑は独特の景観をもった、海と焼物のまちと言ってよいでしょう。今では、車が入れない曲がりくねった細い路地のまわりに、かつて焼物を焼いた工場群が時を忘れたように静かに佇んでいます。

常滑では、中部国際空港と共生し、世界に開かれた生活文化都市の実現を目指し、平成 8 年 3 月に 1996 年から 2015 年の 20 年間を計画期間とした第 3 次総合計画「とこなめ 21 世紀計画」を策定しています。そのなかで、まちづくりへの波及効果の大きな 7 つの事業群、

- 1) 空港との共生拠点づくり
- 2) 新たな住宅拠点づくり
- 3) 新たな産業拠点づくり
- 4) 骨格道路網づくり
- 5) 交流新時代の拠点づくり

6) 福祉社会の拠点づくり

7) 快適な生活環境づくり

をリーディング・プロジェクトとして位置付け、積極的に推進することにしています。特に 5) の交流新時代の拠点づくりでは、レンガ造りの煙突や窯、土管坂など歴史と伝統を持つ常滑焼きの歴史を伝える空間や「やきもの散歩道」周辺に交流拠点施設をつくり、ウイングタウンにメッセやコンベンション施設等の国際的な交流施設を誘致するなどして、人と人との交流によるまちの活性化を目指しています。

2. やきもの散歩道の景観

昭和 45 年に常滑市陶磁器会館が竣工すると、そこを出発点とした「やきもの散歩道」が逐次整備されました。周辺の景観は窯業地ならではの独特的の風情が漂い、近年では観光客でとても賑わうようになりました。この散歩道は A コースと B コースに分かれています（図 1）。A コースは、常滑市陶磁器会館（出発点）→回船問屋瀧田家→土管坂（写真 2）→常滑市登窯広場・展示工房館→登窯（写真 3）→イチキ橋→常滑市陶磁器会館を歩きまわり、所要時間 40~60 分（1.5 km）です。また、B コースは、常滑市陶磁器会館（出発点）→イチキ橋→常滑市民俗資料館・常滑市陶芸研究所→窯のある広場資料館（写真 4）・世界のタイル博物館・トイレパーク→常滑西小学校陶壁→鯉江方寿翁陶像→イチキ橋下→常滑市陶磁器会館をまわり、約 4km もあるために自動車を利用される方が多いようです。

現在、「やきもの散歩道」で見られる景観は、主に明治から大正、昭和初期にかけてつくり出されました。赤いレンガ煙突と大きな黒い板塀の工場で描き出された風景以外にも、A コース、B コースで説明したように見所が多くあります。当時の常滑では、土管や焼酎瓶といった、焼物としては比較的大きな物が数多く生産されていましたが、石やコンクリートに代えて、身近に手に入るその格外品や窯道具を土留めや道路のすべり止め、家の塀や土台などに使用していました（写真 5）。焼成方法が同じ製品を使用しているためか、材質、色調ともに調和がとれたすばらしい景観をつくりだしています。

しかし、これらは常滑という窯業地の都市デザインとして計画的に行われたものではなく、各個バラバラに生み出された景観が、結果として、ごく自然に調和がとれた稀なケースと言えます。したがって、そこに住む人たちや行政は町並みに対して、日常あまりにも見慣れた風景のため、観光客が来るようなすばらしい所だとは思わずには、

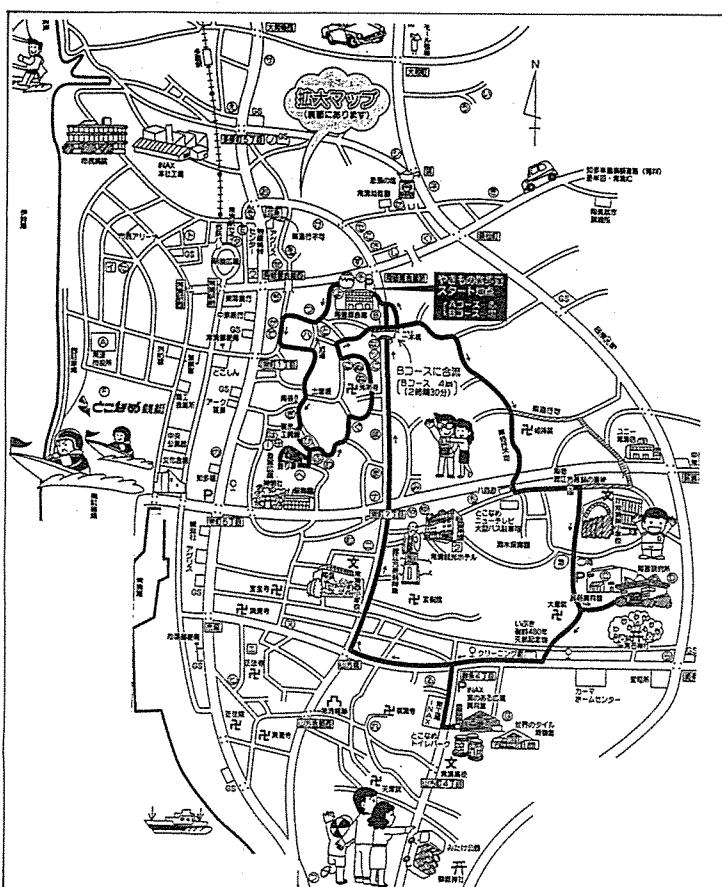


図 1 やきものの散歩道（常滑市観光協会常滑支部）

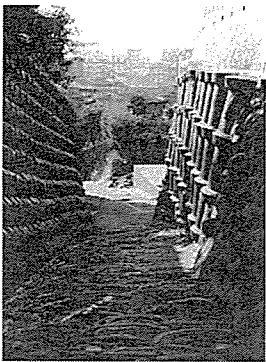


写真2 土管坂



写真3 登り窯煙突

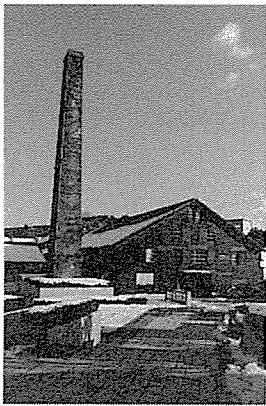


写真4 窯のある広場資料館



写真6 常滑のレンガ煙突の風景

町並み保存の条例を制定しようといった動きは今のところありません。

従来、散歩道にある「土管坂」や、平成7年に国指定有形文化財になった「登窯」の十本煙突の写真などは、常滑地区のシンボルとしてよく宣伝に使われてきました。ところが、近年、観光客が急激に増えたこともあり、散歩道内の観光拠点として施設の整備が行われるようになりました。常滑市は、平成7年に登窯周辺の空き地を、新しく「登り窯広場」として整備しました。現代的なモニュメントや陶壁を広場に配し、隣接する展示工房館には平地窯を保存し、2階では陶芸教室で陶芸を楽しむことができるようになっています。

また、可能な限り原型を復元する工法を用いて整備された、江戸時代から続く「回船問屋瀧田家」の住居跡は、平成12年4月より一般公開され、新しい観光拠点として期待されています。

一方、観光客の増加とともに、民間では空き工場を活用したギャラリー、土産物店や食事処などが増えてきました。

3. レンガ煙突とまちづくり

「やきもの散歩道」周辺の景観には、黒い板塀の工場と赤いレンガ煙突が不可欠ですが、かつては常滑市内に300本以上もあった煙突も今では年々壊されて、50本弱に減少しています（写真6、7）。その原因は、台風、地震などで壊れたか、その恐れがあるために、使用していない煙突を取り壊しているためです。煙突のような構造物の振動性状は、頂部から約1/3の高さ位置付近で、応答せん断力係数が大きく変わるのが一般的で、その部分を中心に補強すれば、レンガ煙突を安全に保存することが可能です。季節によって違う表情を見てくれるレンガ煙突による町並み、行政によるレンガ煙突の保存が期待されます（写真8）。

4. 市民活動とまちづくり

まちづくりには施設などのハード面だけでなく、ソフト面、すなわち、まちに対する市民の意識の向上が必要です。自分たちの町の歴史を踏まえ、誇りや愛情を持つことが大切だという観点から、常滑では市民活動も積極的に行われています。「常滑郷土文化会つちのこ」は、十数年にわたり、地域の歴史文化の探求に努めていますし、生活文化を広く知ってもらうために、新聞や写真集などの発行を定期的に行ってています。

また、「常滑国際焼物ホームステイ」による外国人の受け入れも、既に10年以上続いています。毎年、様々な国の陶芸家20名程が一ヶ月間、各家庭にホームステイして、常滑焼ならではの技術

を習得し、焼物を制作して好評を得ています。世界中の人と触れ合う中で、市民にとっては常滑の再発見にもなっています。こうした地道な取り組みにより、常滑のもつ生活文化の良さを感じる市民が増えつつあります。

5. 最後に

現在、常滑市は中部国際空港の建設を控えて、大きな転換期を迎えています。常滑のまちが培ってきた個性を絶やすことなく、次の世紀につなげるためには、官民が一体となった、さらなる取り組みが必要であり、特に、「とこなめ21世紀計画」のリーディング・プロジェクト5)交流新時代の拠点づくり、の成果が期待されます。



写真1 窯業最盛期の常滑の景観

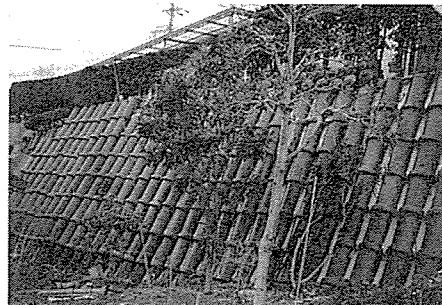


写真5 土管の擁壁



写真7 常滑のレンガ煙突の風景



写真8 雪景色のレンガ煙突群

産地機能の再編を 目指す常滑「やき ものの里」計画

杉戸 厚吉

SUGITO ATUYOSHI

社団法人 地域問題研究所
計画部長

1. 産地の現状

常滑は、「六古窯」の一つとして千数百年の歴史と、900年の陶磁器の大量生産の歴史がある。現在でも生産量は全国有数の規模を維持しており、我が国を代表する陶磁器産地である。

しかし、海外産地との競争による国際的な競争力の低下、人材の確保難による従業員の高齢化の進展など、他産地と同様に陶磁器産業を取り巻く環境はますます厳しさを増している。特に市街化の進展は、騒音・振動問題を拡大し現在地での操業環境を悪化させている。

現在事業中の中部国際空港の建設は、地価・人件費の上昇、住宅市街化の促進をもたらし、市内での操業をますます困難にし、移転・廃業を余儀なくされる恐れがある。そこで業界から発案されたのが「やきものの里」計画である。

2. 「やきものの里」のねらい

(1) 産地生き残りの条件を克服

「やきものの里」は、①将来にわたって安心して操業できる場所の確保、②人材が定着できるような職場環境の整備、③コスト競争に耐えられる生産設備の近代化、④新製品開発や販路開拓に向けた研究開発・共同事業の促進といった産地生き残りの条件を満たすため、産地を構成する各工程の機能を維持したままで新天地に集団移転する計画である。

そこには、悪影響が懸念される中部国際空港の影響をむしろプラスに転化しようとするねらいもある。

(2) 交流拡大のインパクトを生かす

知多半島は、名古屋市に近接した都市近郊型観光地として、観光客の入り込み客が増加している。さらに、中部新国際空港の建設によって、様々な交流が拡大し、それにより常滑焼産地にも、多様なインパクトが想定される。

こうしたインパクトを常滑焼き産地の活性化に生かすために、まず交流拡大により期待される

「販路拡大、直接販売機会の拡大」が、製品の付加価値の向上と産地イメージの形成を促進し、それが「人材育成・人材定着」に繋がり、さらにその結果として「新製品開発の促進」が進むといった異なるインパクト間の相乗効果による波及効果の好循環を目指す必要がある。そのためには、産地の持つ各種の機能が集約化され、それぞれの機能が有機的に活用できる拠点形成が必要となる。それが、「やきものの里」である。

(3) 文化産業化による高付加価値産業の実現

ますます厳しくなる国際競争の中で常滑の産地が生き延びるために、国際的な価格競争とは

異なる土俵で競争できる新しい付加価値を創造することが必要である。

そのためには、従来のように物づくりに専念するだけではなく、陶磁器を生かした生活の提案や焼き物の技術を生かした新しい工芸分野の開拓できる産地になる必要がある。

この計画は、「やきものの里」を拠点に、既存の物づくり機能をベースに研究開発機能、人材育成機能、国際交流機能、観光交流機能、芸術文化機能などを結合させるとともに、その機能を生かして陶磁器の製造メーカー、陶芸家、各種分野のデザイナー・工芸家、海外の産地メーカー、観光客・生活者との幅広いネットワークを形成し、従来の陶磁器製品や陶芸の枠を超えた新しい文化的価値が創造できる産業への発展を目指すものである。

3. 地域文化を支える産業コミュニティの再生

伝統的な地場産業都市の文化は、産業人と生活者の両面を持つ住民による産業コミュニティの中で育まれてきた。常滑市も地場産業都市として、独特の文化と景観が残されている。これは今だに産業コミュニティの機能が維持されている証である。しかし常滑市でも職場と生活の分離による産業コミュニティの解体の動きは、今後加速的に強まるものと予想される。「やきものの里」計画は、陶磁器産業の生き残りをかけた事業であると同時に、地域文化を支える産業コミュニティの再生を目指す事業である。

4. おわりに

全体構想約40haのうち、当面は約13haを第1工区として事業化に取り組んでいる。しかし土地問題もあって十分な進展が見られないのが実状である。単なる工業団地の理解しか得られていないことも要因の一つになっている。地域文化の再生・創造の意義を地域内でもう一度理解してもらう努力が求められている。

陶芸のまちの都市

環境デザイン

多治見市における まちづくり

一本町筋オリベストリー トの事例紹介ー

山本元太郎

YAMAMOTO GENTARO

多治見市企画部政策推進課

1. 多治見市の歴史と現況

多治見市は岐阜県の南南東に位置し、名古屋市から北東へ36km、JR中央線の快速で30分程と交通の便に恵まれているため、昭和40年頃より名古屋市のベッドタウン化しつつある人口10万5千人のまちである。

奈良、平安の時代から陶磁器産地として知られており、安土桃山の時代になると、志野、織部や黄瀬戸を開発し、明治になると多治見西浦焼が33年(1900年)のパリ万博で銅牌を受賞するなど、一大窯業地として発展をしてきた。

近隣の2市1町(瑞浪市、土岐市、笠原町)を合わせると、陶磁器の全国生産量の50%以上を生産しているが、バブル崩壊後の景気の低迷やより安価な輸入製品との競争によって苦戦しており、陶磁器産業の活性化策と共に新たな産業おこしの必要性に直面している。

昭和61年からは3市1町でトリエンナーレ方式で国際陶磁器フェスティバルを開催し、美濃焼の産地として積極的にPRを展開するとともに、観光客を初めとするビジターの誘致に努めているが、年間60万人程度で推移しており、同じ陶磁器のまちである愛知県の瀬戸市、常滑市の約半分とまだまだ少ないので現状である。

しかしながら、平成14年秋には岐阜県と3市1町の広域事業として運営するセラミックパークMINOがオープン予定であり、17年には瀬戸市において万国博覧会が開催されるなど、ビザーズ産業おこしの条件が整いつつある。

2. オリベストリート構想

岐阜県は平成6年が郷土の先人である古田織部の生誕450年に当たることから、織部の精神性(自由奔放、開放性、多焦点と非対称など)をオリベイズムと称し、あらゆる分野に活用していくオリベプロジェクトを進めている。

本市においては平成7年から同プロジェクトに連動する形で、陶磁器産業のビザーズ産業化を目指し、オリベストリート構想を進めている。

同構想を推進する上で、本市は当初から「市民と行政の協働」を掲げており、平成8年から9年に掛けて、陶磁器の生産地区や歴史的な商家や蔵のまち並みが残る地区など、市内6候補地を選び、シーズの調査・展開方向の検討を市が行い、各地区の代表者に提示して協議を重ねる中から、第1期候補地として、「里」と「町」である「市之倉地区」と「本町地区」を選定した。

市之倉地区は60社以上の窯元が集まる生産地で、平成6年からビジター誘致のイベントに取り組んでおり、窯元でもギャラリーを新設・併設す

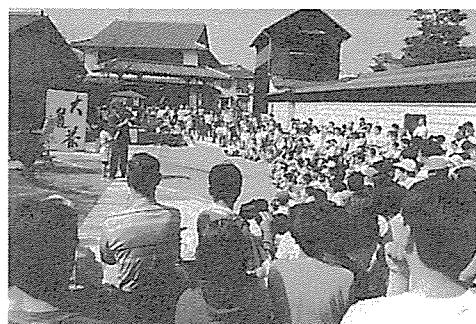
るなど、まちづくり実行委員会を中心に新たなまちづくりが進められている。行政の役割分担として、同地区を流れる市之倉川の修景事業やビジターケース回遊させるためのサイン計画作りを行っている。

3. 本町筋オリベストリート

本町筋地区は、明治時代から陶磁器の大集積地となっていたため、当時の商家や蔵が残っている地区であり、本市の陶磁器文化・歴史を今に伝えている。

この地区には商店街ではなく、既存の組織は無かったが、一部住民の熱意により、平成8年からまちづくりの方向性を地区住民と行政が一緒に研究するため、まちづくり研究会が組織された。当初はオリベストリート構想に対して、「自分はこのまちに住んでいるだけ」「観光客が増えれば混雑するなど不便になるだけ」という否定的な意見も少なくなかった。かつての賑わいを体験してもらうため、平成10年からは、2日間で15万人の人出のある陶器まつりを30数年振りに本町地区に戻したり、国民文化祭を誘致して、住民の方々にはイベントに参加してもらうなどの努力を地区と行政で重ねていった。

本町筋オリベストリートでの陶器まつり



陶器ギャラリー前



地域公園施設前、スタッフは地区の住民

まちづくり研究会と行政それぞれの代表者によるまちづくり協議会で合計 11 回の協議を行うなかで、「市民と行政が協働しつつ」「責任ある団体ができるところから進めていく」ことで合意し、そのために第三セクターのまちづくり会社である株式会社「華柳（はなやぎ）」が平成 11 年 3 月に設立された。

この間、本町オリベストリートの中核施設をどう誘致するかに苦心していたが、平成 10 年の「中心市街地活性化法（略称）」成立に伴い、本市も中心市街地活性化基本計画を策定し、オリベストリート構想に共感した地域振興整備公団により「多治見都市型産業基盤施設」の建物本体が本年 3 月竣工したところである。本町地区の景観に配慮しつつ、オリベイズムの非対称性や新旧のコンビネーションを大切に、一部蔵風にデザインされたこの施設には、1、2 階に陶磁器を中心とした物販と飲食が合計 19 テナント、3 階に市の施設である多治見市文化工房が入居する予定である。文化工房には本格的なギャラリーと上絵付けを中心として様々な体験メニューを提供する工房を設置する予定で、今後内装工事を経て秋頃にオープン予定となっている。

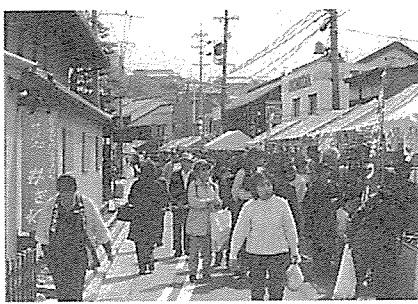
本町筋オリベストリートは、主要地方道多治見恵那線（約 400m）を中心に広がる 4.2ha の地区であるが、この県道は約 3/4 が一方通行となっており、幅員も狭いところでは 7m 程しかなく、通過交通が多いため、安全に観光客が歩ける道路とは言えない状態であった。また、昭和 34 年には都市計画道路として幅員の 16m 化の決定がされているが、16m 化すれば本町オリベストリートのまちなみが全て壊れてしまう状況にあった。

これらはオリベストリート構想の当初からの課題となっており、岐阜県と協議を重ねてきた結果、都市計画道路については代替する都市計画道路を設定し、通過交通を減少させる計画とした他、伝統的なまちなみを活かしたまちづくりをおこなうための地区計画を定め、本年度中に県の都市計画審議会に特殊街路への用途変更申請を行う目処が付けられる状況となった。また、県道そのものについても、上記の動きを先取りする形で、歩行者優先のコミュニティ道路化する工事を平成 11・12 年度に県建設事務所に行ってもらっており、ビジターに安心して散策していただける状況が整いつつある。

4. 終わりに

今日、本町筋オリベストリートには、多治見都市型産業基盤施設、サロン・ワインバー、蕎麦屋、アンティークショップなど民間・三セク・市のそれぞれの経営主体の新しい建物・店舗が張り付き、ビジターを受け入れるための一定の機能が揃つてきたところである。

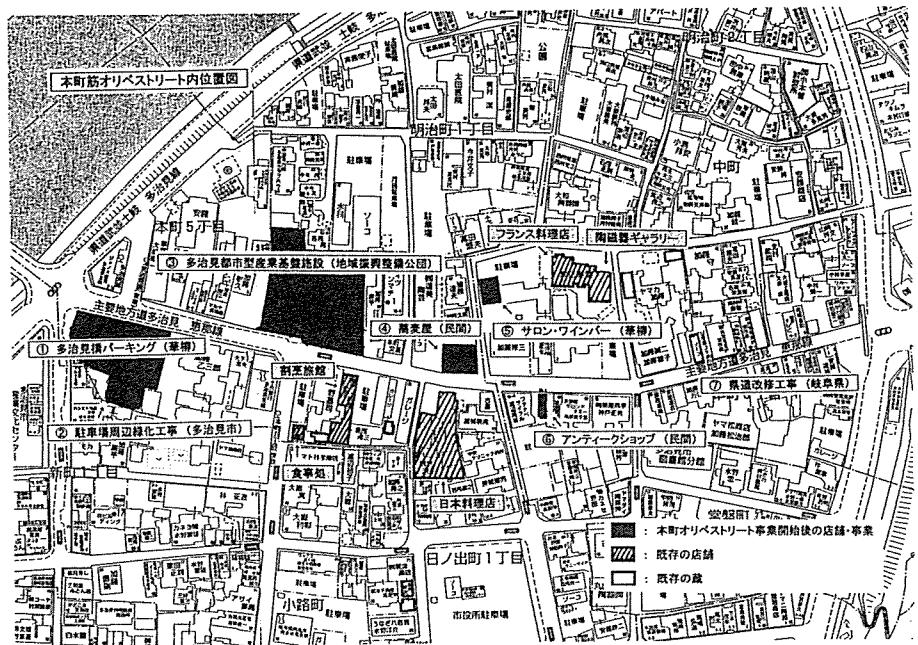
今後にも、本町筋オリベストリートをどう PR してビジターの集客を図っていくのか、どんな店舗を新たに誘致していくのか、駐車場不足の問題をどう解決していくのか等、まだまだ難しい問題が山積であるが、㈱華柳や地区住民と密接に連携しつつ、まちづくりを進めていきたいと考えている。



本町筋オリベストリートでの陶器まつり



多治見中心市街地都市型産業基盤施設全貌



本町筋オリベストリート内位置図

■事業委員会報告

中野 恒明
NAKANO TSUNEAKI
事業委員長
㈱アブル総合計画事務所

総会時開催イベントの案内

今年も7月15日の総会開催時に事業委員会主催の3つのイベントを行います。内容、時間配分は次の通りです。とりわけ、モニターメッセはJUDIの収益事業として定着してきており、昨年も110万円余りの収入を得ております。モニターとなる会員の方々の参加が不可欠です。会員各位のご参加を期待します。

1. 第3回JUDI交流サロン (13:30 ~ 15:30)

パネルディスカッション「地方分権への胎動と地方都市の都市デザインの潮流」、登壇者、関東ブロック（2名）、中国ブロック、四国ブロック、中部ブロック（各1名）、計5名を予定しています。

昨年と同様に都市環境デザインガイドブックに携わってきた編集委員およびブロック幹事の方々より、各ブロックの編集過程に出てきた様々な都市の問題、事象などをスライドとともに解説していただき、それをもとに会場の皆さんとの意見交換を行います。
(担当：南條、西沢、佐々木)

2. 2000都市環境デザインモニターメッセ (15:45 ~ 18:15)

参加企業数、割当時間も昨年並みを予定しています。新作は20分（16万円）、過去の発表作品のレビュー10分（8万円）の時間枠で、OHP・スライド等によるプレゼンテーションと会場との意見交換を行います。今年は選定委員会によって内容審査を受けた10数社になる見込みです。

(担当：井上、中野)

3. 懇親会（第一ホテル・シーフォートにて、18:30~20:30）

会員とモニターメッセ参加企業の方々の参加により、例年同様懇親の場を予定しています。
(担当：井上、中野)

都市環境デザインガイドブックの出版の件

ガイドブックの編集の話が出たのが1994年の春、6年余りの歳月が流れました。3代目の事業委員長に就任し、雑誌「造景」の連載まで漕ぎ着け、関西ブロックの原稿を編集部に送付したところで、編集方針の衝突で一旦白紙となっていました。この件についてはJUDIニュース051(1999, 11)に報告したとおりです。

その後、幾度か編集委員会および各ブロックの会合を重ね、「造景」編集部との協議の末、この秋より掲載を行うことが復活し

ました。まずは北海道ブロックから掲載が始まります。(2000年9月号からの見込み)

また編集体制も全国の編集委員会、選定委員会を大きく改組し、各ブロックの活動を主体とすることを確認するとともに、責任体制を明確にするための編集コアを設けました。あわせて取り組みの遅れていた関東ブロックについては、東京と南関東（湾岸を主体）、北関東甲信、の3つに分割し、それぞれにブロック幹事と編集委員経験者による編集責任体制づくりを要請しました。

全体を調整する編集コアに、中野（事業委員長）、南條、西沢（前・元事業委員長）の3名、事務局として佐々木の4人体制として再スタートします。なお、Eメールを活用した編集委員間の連絡網（管理者、中国ブロックの金谷委員）を立ち上げました。

数年がかりで雑誌掲載の後、1冊の本となる手はず。今度こそ「おおかみ中年」と呼ばれないように、各ブロックの編集責任者ともども頑張りたいと思います。

■研修研究委員会 報告

岸井 隆幸

KISHII TAKAYUKI

日本大学

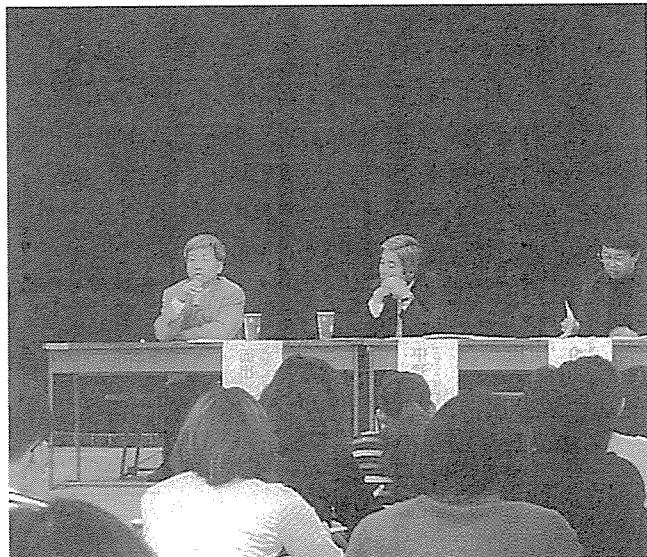
"JUDI学生セミナー2000"大盛会の報告

さる5月20日（土）の午後、お茶の水の日本大学理工学部9号館でJUDI学生セミナーが開催されました。

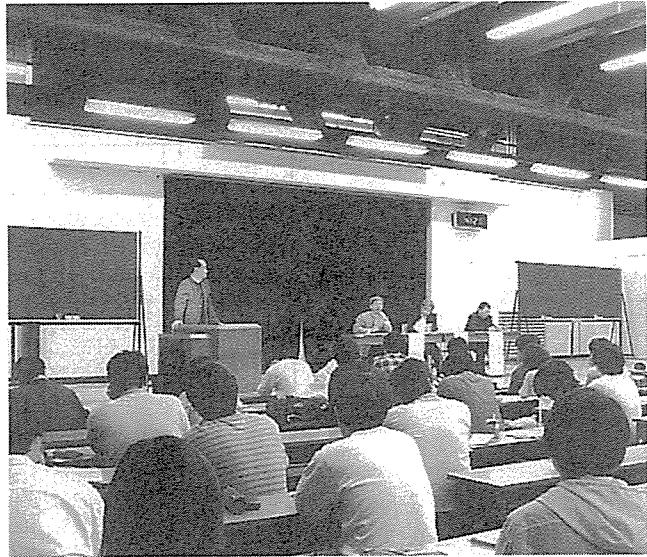
当日は24の大学（50音順に、関東学院大学、京都造形美術大学、慶應大学、工学院大学、埼玉大学、芝浦工業大学、女子美短大、昭和女子大学、拓殖大学、千葉大学、筑波大学、東京大学、東京学芸大学、東京工芸大学、東京造形大学、東京電機大学、東京農業大学、東京農工大、東京理科大学、

東洋大学、都立大学、日本大学、法政大学、早稲田大学）、2つの専門学校、15の民間企業等から約200名の参加があり、3時間の長丁場にも関わらず最後まで盛況でした。

JUDIからは宮城俊作氏、中野恒明氏、倉田直道氏、面出薰氏が講演者として出席し、それぞれ自分の作品をベースに都市環境デザインへの取り組み・考え方について語りましたが、答えきれないほど数多くの質問が寄せられ、都市環境デザインに対する学生の関心の高さがうかがわれたように思われます。



3人の講演者と熱心に耳を傾ける学生



JUDI学生セミナー会場の風景

10周年記念事業

■JUDI10周年記念 全国大会in大津

南條 道昌

NANJO MICHIMASA

10周年記念事業実行委員会副委員長

株都市計画設計研究所

JUDI10周年記念全国大会in大津 開催決定！

都市環境デザイン会議は、その活動を開始してから10年を数えることとなった。

設立当初の運動・活動の主旨が、結果的に社会的な反応を期待どおりに引き出せたのかどうか、社会の側の10年間の変化から見て、活動の目標・方針がそのままよいのか、など初心に戻って熟慮・反省しつつ、新たなこれから活動を考え、議論をする適当な節目を迎えると言える。

そこで10周年記念事業を、なるべく多数の会員が集まりやすい企画のもとに、実施することが代表幹事会で決まり、活発な活動を展開している関西ブロックのフォーラムと代表幹事会が主催するJUDI賞の選考と全国ブロック幹事会とを併催する形で執り行うこととなった。

このため10周年記念事業委員会を大阪大学の鳴海先生を委員長に、記念フォーラム

を立命館大の山崎先生を委員長に、JUDI賞選考を都市計画設計研究所の南條を委員長に、それぞれ組織して企画進行を図ることとした。6月初旬現在で具体的な企画内容の検討・告知等が進行中である。

大会の開催は、2000年11月2・3・4日の3日間と決まった。2日に全国の会員その他の参加者に大津に集まつていただき、同日、関西ブロック主催のフォーラム（テーマは「環境共生型都市デザインとは何か」の予定）ならびに大型の船による紅葉のなかの琵琶湖クルーズ。大津泊後、3日にJUDI賞・大賞の選考会と表彰式ならびに全国ブロック幹事会。4日に琵琶湖周辺の町並み・史跡などのツアーを企画予定である。

詳細な集合時間、宿泊の申し込みなどについては今後発行されるチラシ等をお見逃し無く。会員各位に是非とも参画をお願いしたく、この日取りをJUDI活動の今後のために確保していただきたい。（南條道昌記）

事務局より

1. 新会員の紹介

2000年3月1日～4月30日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

4月30日現在の会員数は、529名です。

氏名	勤務先
杉山 朗子	㈱日本カラーデザイン研究所
斎藤 治夫	㈱因幡電機製作所
片峰 美可	清水建設㈱
関本 雅和	関本雅和空間工房

2. 退会者（2000年3月～4月）

村野博司さんが逝去されました。慎んでご冥福をお祈りいたします。

3. 住所変更等（敬称略）

氏名	変更内容(新)
井上 博夫	コスモ設計室 〒761-0130 香川県木田郡庵治町 5527-18 Tel 087-871-3613 Fax. 087-871-3625
内田 和孝	〒158-0083 世田谷区奥沢5-36-4 Tel & Fax. 03-5483-5570
大石憲治郎	㈱大石造園設計事務所 〒169-0073 新宿区百人町1-16-21-301 Tel 03-5337-3885 Fax. 03-5337-3905
川俣 雅秋	㈱栃木都市計画センター小山事務所 〒323-0807 栃木県小山市城東3-6-27 Tel 0285-30-1025 Fax. 0285-30-1026
平澤 薫	㈱ユーピーエム 〒141-0031 品川区西五反田8-1-8 Tel 03-5740-7400 Fax. 03-5740-7411
松波 龍一	㈱松波計画事務所 〒731-3167 広島市安佐南区大塚西6-10-1-201 Tel 082-849-5301 Fax. 082-849-5302
吉田 八郎	浦和レミコン㈱ 連絡先自宅 〒360-0815 熊谷市本石1-18 Tel & Fax. 048-525-1993

広報・出版委員会

澤木 俊間	石崎 均
土田 旭	伊藤 光造
近田 玲子	清水 泰博
菅 孝能	河本 一行
中嶋 猛夫	森川 稔
櫻井 淳	横山あおい
松村みち子	吉田 慎悟
白濱 力	作山 康